

洋13-55

「ローマでアモーレ」

★★★★★

2013(平成25)年5月9日鑑賞<GAGA試写室>

監督・脚本：ウディ・アレン

〈ハイリーとミケランジェロ、それぞれの父親ジェリーとジャンカルロの物語〉

ミケランジェロ（弁護士）／フラヴィオ・パレンティ

ハイリー（ローマにやってきたニューヨーカーの女性）／アリソン・ビル

ジェリー（元オペラ演出家、ハイリーの父親）／ウディ・アレン

フィリス（精神科医、ハイリーの母親）／ジュディ・デイヴィス

ジャンカルロ（葬儀屋、ミケランジェロの父親）／ファビオ・アルミリアート

〈アントニオとミリー、アンナの物語〉

ミリー（田舎育ち、アントニオの妻）／アレッサンドラ・マストロナルディ

アントニオ（田舎育ち、ミリーの夫）／アレッサンドロ・ティベリ

アンナ（コールガール）／ペネロペ・クルス

ルーカ・サルタ（スター男優）／アントニオ・アルバネーゼ

ホテルの強盗／リッカルド・スカマルチヨ

〈ジャックとサリー、モニカ、そしてジョンの物語〉

ジョン（著名なアメリカ人建築士）／アレック・ボールドウィン

ジャック（建築家の卵）／ジェシー・アイゼンバーグ

サリー（ジャックの恋人）／グレタ・ガーウィグ

モニカ（サリーの親友、小悪魔な売れない女優）／エレン・ペイジ

〈レオポルドの物語〉

レオポルド（ローマ在住の平凡な中年男）／ロベルト・ベニーニ

2012年・アメリカ、イタリア、スペイン映画・111分

配給／ロングライド

＜4つの物語を同時進行！この手腕に拍手！＞

ローマを舞台にした映画といえば、4400万ドル（現貨換算で3億ドル以上）という巨額の製作費をかけた『クレオパトラ』（63年）を始めとする「ローマ帝国」を扱った古代史劇を思い出しが、最も有名なのは「永遠の妖精」オードリー・ヘプバーンの名を世界に知らしめた『ローマの休日』（53年）だろう。私はローマには行ったことはないが、イギリス、オランダ、イス、ドイツ、フランスを旅行した時、最も印象に残った都市はやはりパリ。前作『ミッドナイト・イン・パリ』（11年）で観光の都パリ、芸術の都パリを舞台とした、遊び心いっぱいの「タイムスリップもの」を満喫させてくれた（『シネマルーム28』25頁参照）ウディ・アレン監督が、本作では舞台をローマに。

冒頭に登場するのは今ドキ珍しく、交差点の真ん中に立って手信号で交通整理をしているお巡りさんの姿。本作は、本来お堅いはずのこんな「公務員」の「口上」によって「ローマの街には、人の数だけアモーレな物語がある！」と告げられたうえで、ローマを舞台にした4つの物語が同時進行していく。1つのテーマの下にいくつかの物語を集めた「オムニバス映画」はよくあるが、本作のように独立した4つの物語を同時並行で進行させていく構成は珍しい。ヘタにそんなことをすると物語がこんがらがってくる危険があるが、そこは百戦錬磨のウディ・アレン監督のこと。自分自身も元オペラ演出家ジェリー役で出演しているウディ・アレン監督は、「話が混線したのでは俺の沽券に関わる」とばかりに、4つの物語をそれぞれ見事なバランスで同時進行させていく。相も変わらぬウディ・アレン監督のそんな手腕に拍手！

＜ラストは「スペイン階段」！すると最初は？＞

『ローマの休日』の名シーンの1つは、オードリー・ヘプバーン扮するアン王女が、スペイン階段でアイスクリームを食べるシーン。そこでアン王女のセリフは、「1日中、気ままなことをして過ごしたい。カフェに座ったり、お店を見たり。雨の中を歩いたり・・・楽しいでしょうね」だった。イタリア・ツアーにおけるガイドさんの定番解説は「マンジャーレ、カンターレ、アモーレ」だそうだ。これは「食べて、歌って、愛してるうちに終わる一生」という意味で、その是非を論ずれば難しいが、本作は聞き慣れたあるイタリアの音楽から始まり、ラストは「スペイン階段」で楽団が同じ曲を演奏するシーンで終わる。

1997年の新京都駅ビル完成によって登場した「室町小路広場（大階段）」は、LEDライトによるイルミネーション等で近時かなり有名になったが、ローマのスペイン階段には遠く及ばない。また、JR大阪駅北側に完成した「グランフロント大阪」は4月26日のオープンから5月6日までに367万人を集客したが、これはあくまで一時的なもの。腰を据えて「観光立国ニッポン」を演出しなければ、JR大阪駅にある「時空（とき）の広場」もスペイン広場の人気には到底及ばないだろう。本作のラストはこのスペイン広場で終わるが、すると最初の観光地は？

『ローマの休日』では、サンタ・マリア・イン・コスマティ教会にある「嘘をつくと差し入れた手を食いちぎられるんだ」という「真実の口」で、グレゴリー・ペック扮する新聞記者ジョーが手を入れるシーンが最有名だが、「泉に背を向けて肩越しにコイン一枚投げ入れると、もう一度ローマに戻れる」という伝説がある「トレビの泉」のシーンも有名だ。本作には、「真実の口」は登場せず、第1話〈ハイリーとミケランジェロ、それぞれの父親ジェリーとジャンカルロの物語〉は、夏休みを利用してニューヨークからローマにやってきた女性ハイリー（アリソン・ビル）が地元のイケメン弁護士ミケランジェロ（フラヴィオ・パレンティ）と「カンピドリオ広場」で出会い始まる。この広場の下でハイリーがミケランジェロに道を尋ねたことがきっかけで2人は意気投合し、「トレビの泉」での語らいを経て、まるでロマンス小説の主人公のような恋に落ちていくわけだ。そう考えると、「アモーレ」には美しい観光地がいかに不可欠かということがよくわかる。本作ではストーリーの展開と共に、スクリーン上で観る美しい観光地巡りもしっかりと。

＜オペラの本場イタリアには、こんな男も・・・＞

ローマの街でたちまちミケランジェロとの恋に落ちたハイリーは、ニューヨークから両親をローマに招き、ミケランジェロやその両親との顔合わせまでとんとん拍子に話が進んだが、第1話ではここからの展開が奇想天外で面白い。まずは、ウディ・アレン扮するハイリーの父親ジェリーが元オペラ演出家だというのがミソ。精神分析医の妻フィリス（ジュディ・デイヴィス）との間の会話もかなり風変わりだが、ジェリーとミケランジェロやその両親との会話がまるでかみ合っていないところも興味深い。しかし何より面白いのは、葬儀屋を営んでいるミケランジェロの父親ジャンカルロ（ファビオ・アルミリアート）がシャワーを浴びながら歌うオペラの楽曲が、一流のテノール歌手顔負けのすばらしいものだということだ。現役時代にオペラ演出家として時代の先端を突き進んでいたにもかかわらず、世間からも妻からも認めてもらえなかつたことを常々不満に思っていたジェリーは、ここでジャンカルロを担ぎ出してオペラ界への復帰を画策し始めたが、さてその展開は？

自分の歌声が妻から「近所迷惑よ」と言われているジャンカルロは、当初からジェリーの申し出には消極的だった。そして案の定、しぶしぶテストを受けてみると、色々な出来。これによってミケランジェロたちの不満は一気にジェリーに向かい、下手するとミケランジェロとハイリーとの結婚問題にも暗雲が垂れ込め始めたが、そこでジェリーが考えた起死回生の手段は、舞台上にシャワーを持ち込むこと。ジャンカルロの美声はリラックスしてシャワーを浴びている時にしか發揮できないのであれば、シャワーごと舞台に持ち込めばいい。なるほど理屈はそのとおりだが、さてそんなジェリーの斬新かつ前衛的な舞台演出は成功するの？小泉元首相のオペラ好きは有名だが、それによってブッチャーニのオペラ『トゥーランドット』の「誰も寝てはならぬ」の楽曲が有名になったが、さすが本場オペラの国イタリアには、ジャンカルロのような男も・・・。

＜田舎育ちの新婚カップルは、ローマが苦手・・・？＞

第2話〈アントニオとミリー、アンナの物語〉は、ローマ最大の駅、テルミニ駅にアントニオ（アレッサンドロ・ティベリ）とミリー（アレッサンドラ・マストロナルディ）が降り立つシーンから始まる。いったんホテルの部屋に入ったミリーがアントニオに対して美容院に出かけると言ったところから、これまた奇想天外で面白いストーリーが展開していく。普通ならピックリしつつ思いがけないサービスの提供にニヤつくところだが、夫のアントニオは、突然ノックして入ってきたコールガールのアンナ（ペネロペ・クルス）の登場にピックリ。どうも派遣先をまちがえたらしいが、料金は精算済みだから相手は誰でもいいとばかりにベッドで迫ってくるアンナと絡み合っているところに、アントニオの親戚たちが入ってきたから大変。ボディライン丸出しの真っ赤なミニドレスを着たアンナのようなド派手な女を新妻だと紹介するのは、いくら何でも馬鹿げているが、「アモーレなら何でもあり」の国イタリアでは、それもOK？親戚の人たちはアントニオに仕事を斡旋するべく、有力者を集めたパーティーにアントニオとその新妻アンナを招待したが、何とその有力者たちの多くはアンナの馴染みの客。パーティーの合間に「初夜の訓練」とばかりにアントニオがアンナから性の手ほどきを受けるのもご愛敬だが、思わぬ展開の連続についニヤリ・・・。

他方、「女は地図が読めないもの」と相場が決まっている（？）が、美容院の場所を聞くたびにますます道に迷っていくミリーはケータイまで落としてしまい、完全に立ち往生。そんな中、ミリーが紛れ込んだのは、憧れの中年男優スターであるルーカ・サルタ（アントニオ・アルバネーゼ）の撮影現場だ。妻と別居中のサルタはすぐにプレイボーイぶりを発揮し、ミリーに対して露骨な色目を使ってきたが、ミリーの方もかねてからの大ファンだったサルタとの握手や食事、さらにはホテルの部屋に入ってからのアプローチに、かなりメロメロ。新妻の身に大きな危険が・・・。しかし、そこに登場してきたのがトイレの中に潜んでいた一見イケメン風の強盗だが、そこから始まるドタバタ喜劇風の展開はまさにウディ・アレン監督の面目躍如。こんな楽しい展開なら、この第2話だけでも十分映画代を支払う値打ちがあるはずだ。

第2話は、ローマでの新生活を夢見た純朴な新婚カップルが「やっぱり田舎に帰って地道な生活をしよう」というオチで終わるが、それは決してローマという街の魅力を減殺するものではない。ローマの街でこんな得難い体験をすることができるからこそ、今後田舎に戻った2人の絆はより固く結ばれるはずだ。

＜恋人の男と親友の女性を近づける愚は・・・？＞

第3話〈ジャックとサリー、モニカ、そしてジョンの物語〉は、今は売れない女優ながら頭が切れてヨークが面白く、小悪魔な色気も備えた女友達のモニカ（エレン・ペイジ）の頼みをサリー（グレタ・カーウィグ）が受け入れ、恋人のジャック（ジェシー・アイゼンバーグ）と共に暮らしているアパートにモニカを招き入れてしまうことから始まる三角関係（？）の物語。面白いのはローマの街を散策中の著名なアメリカ人建築家ジョン（アレック・ボールドウィン）が、かつて若い頃の自分が住んでいたアパートで恋のサリーと共に暮らしているジャックと出会い、そのアパートを訪れるこによって、ジョンがジャックに対するアドバイザー的役割を果たすこと。本来こんな映画づくりは邪道だが、ウディ・アレン監督がやると、そんな捷破りの手法（？）がかえって面白くなるから不思議だ。自分がサリーを愛していることに自信満々だったが、モニカに翻弄され、いつのまにかモニカに心を奪われていくジャックに対して、若い日の苦い恋の記憶を甦らせたジョンは、「やめておけ。その女は嘘つきの勘違い女だぞ」と警告したが、さてジャックは・・・。

自らのセックス体験を赤裸々に語ることによって、あるいは有名な芝居や小説のセリフの一節をチラリと示すことによって男はたちまちメロメロになるのだから、男って単純・・・。さらに、建築家志望のジャックはモニカが有名な建築物にも造いけ深い（？）ことを知るとさらに・・・。このまま進めば弁護士の介入が不可欠な泥沼紛争に突入するところだが、そこはウディ・アレン監督。いよいよサリーと別れてモニカと共に新たな旅立ちをしようとしているジャックの前で、モニカにかかってきた一本の電話が伝えたものとは・・・？この体験もきっとジャックにとっていい体験となり、今後はより一層サリーとの愛の絆を強めることになるのでは・・・。

もちろんウディ・アレンは大成功し、世界の名声を欲しいままにしている大監督だが、第1話から第3話までに登場する「有名人」や、第4話で彼が創り出した楽しいような苦しいような有名人のストーリーをよくよく考えてみると、ウディ・アレン監督も現在の自分の立場に一抹の不安が・・・？それはともかく、マスコミ攻勢から解放され、やっと静かな生活を取り戻したレオポルドが「やっぱり有名人の方がいい！」とばかりに妻の静止を振り切ってヴェネト通りに飛び出すシーンを見ていると、そこはかとない人生の哀愁が・・・。しかして、このヴェネト通りもマルチェロ・マストロヤニ主演の『甘い生活』（60年）の舞台となった、官庁や大使館、高級ホテル、カフェが建ち並ぶエレガントで華やかな大通りで、ローマの街の観光名所の1つ。なるほど、なるほど・・・。

2013(平成25)年5月10日記